



主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)

言がわたしたちの間に宿られ、生き続ける

あらためて、主の降誕おめでとうございます。夜半のミサで、人となられた御子は、人が避けて通れない死の苦しみ、恐怖に打ち勝つためにおいでになったと話しました。私たちのそばにいてくださるために、神の独り子は人となってくださいました。神が人となってくださったことを、違う見方で思い巡らすために、日中のミサではヨハネによる福音書が選ばれています。

私たちは驚くべき能力を備えています。それは「言葉を記憶する」能力です。幼い頃に習い覚えたことはずっと忘れないものですが、記憶に残っているのは「言葉」ではないでしょうか。

実際には、その当時の様子を覚えているのだと思いますが、長い時間を経ていくうちに、当時の場面が書き換えられることもあります。しかしそれでも思い出せているのは、当時の様子を「言葉」が組み立て直してくれるからです。形ではない「言葉」は、どんなに時間が経過しても記憶に残っているのです。

本日の「主の降誕(日中)」のミサは、「言(ことば)が肉となった」というテーマです。これも、実際の出来事がきつとあったでしょう。その意味では歴史の中で一度だけ起こったその様子だけが、ご降誕の出来事だと言えます。

けれども、クリスマスの飾り付けはたった一つではありません。とても豪華な飾り付けの馬小屋があったり、飾りを少なくして人それぞれが想像を膨らませるような工夫をしたり、いろいろあると思います。

もし、歴史の中で一度だけ起こったその様子だけが正しいと言うのであれば、教会ごとに違う飾り付けはどれも間違っていることになります。そうではなく、「言葉」がそれぞれの馬小屋に現されていれば良いと思うのです。例えば、「言は、自分の民のところへ来た」(1・11)この言葉が形になっていれば、それで十分だと思うのです。

馬小屋から得られる学びは大切です。私たちの中に残る「主の降誕」は、本当はどんな記憶なのでしょう。幼い頃の馬小屋の記憶かも知れませんが、よくよく考えるとその記憶は曖昧です。私は、馬小屋ははっきりしなくても構わないと思っています。「言は、自分の民のところへ来た」この言葉が形になっていれば、それで十分だと思うのです。

私たちの中には、ご降誕の出来事が「言葉」として記憶されています。次の通りです。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

(1・14) 私たちの中で、景色は書き換えられることがあります。残り続けるのは「言葉」だと思います。景色は書き換えられているかも知れませんが言葉が変わらないので、同じ記憶として留まっているわけです。

いつまでも変わらないで、私たちの間に宿ってくださるために、神の言葉が人となってくださいました。感謝しましょう。そして、神の言葉にまだ触れていない人にも、神の言葉が宿り、神の言葉に生かされる人になるように、働きかけましょう。